
Voice to call you ~ 君を呼ぶ声 ~

BLUE SHIP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Voice to call you 〈君を呼ぶ声〉

【Nコード】

N8351V

【作者名】

BLUE SHIP

【あらすじ】

高1の葉子はつこは、秘密のチカラを持っている。

けれどそのチカラは、なんの役にも立たないどころか、ただ葉子を苦しめるだけのもので……

とある夏の日の夜、初デートで夏祭りに出掛けた葉子は……？

(前書き)

初めまして、BLUESHIPと申します。「なるう」様への投稿と、短編の投稿も初めてでドキドキしております(……いつもはR指定ありのものを書いてます)

わりと暗いテイストのお話なので、それでも構わないという方だけ本文におすすみください。

皆様にドキドキや切なさを感じていただけると嬉しいです！

『いつかわたしは
人魚姫のように
海の泡となって消えるのだと
信じていました』

そうだったら、だれにも気が付かれずに
そっと消えていけたのに

気付かせるつもりなんて
なかったんです
悲しませるつもりも
なかったんです

泡のように消えることが出来なくてごめんなさい

もしもわたしが消えるのなら
静かに静かに
人魚姫のようにと

願っていたのに
ずっとずっと
願っていたのに』

ふうっ、と大きく息を吐き、わたしはボールペンを置いて、今書
いたばかりの文章を読み返してみた。

……ダメだな、これじゃ。

何が言いたいんだかさっぱり分からない。

頭をふるふると横に振ると、カラカラと音が鳴るのではないかと思ってしまう。

そのくらい、自分の文章力の無さにうんざりした。

「ああ、だめだあ」

独りごちて勉強机に突っ伏す。

本当にダメだ、これじゃ。

誰にも『遺書』だなんて分からない。

わたしは勉強机の右上、唯一鍵のかかる引き出しの鍵をあけて、その書き損じた『遺書』をしまい込むと、またしつかりと鍵をかけた。

わたしの名前は櫻井葉子（いづみ）という。今は高校生になって、初めての夏休みを満喫しているところだ。

今日は夏祭りなので、最近出来たばかりの彼と一緒に出掛ける予定。

ミッキーマウスの掛け時計を見ると、時刻はまもなく十七時十五分になるうとしていた。約束の時間は十八時。でも、待ち合わせ場所は家の近所だから、まだ余裕がある。

「そろそろ浴衣着なくちゃ」

新しく買ってもらった紺地に朝顔の花が咲いた浴衣は、なかなか可愛くて気に入っている。ちなみに帯は黄色で、紺の浴衣に合わせるの是最適。色が良く映えるだろう。

小学生の頃からお母さんに着付けを習ったわたしは、自分で浴衣の着付けが出来る。だいぶ略式なやつだけど。

ウエストのクビレの部分、紐をきゅっと結ぶところにはタオルを巻く。寸胴の方が浴衣や着物ではラインが綺麗なんだよね。あと、

自分のお肉と違ってタオルは動きにくいから着崩れもしにくい。

ん、綺麗に着れた。

帯も自分で巻く。本当は後ろで結べたら良いんだけど、わたしは前で結んで回しちゃうんだ。今日は一文字っていう名前の、リボンみたいなカタチの結び方にした。

「出来た、つと」

最後に、歩きやすいように、浴衣の内側にある紐の下の部分を調整。

よしっ、これで走っても崩れない。

浴衣を着て全速疾走するようなことも、そうそう無いだろうと思っただけだね。

着付け、僅か10分で完了。

髪はショートだから小さめの花飾りを横に付けた。浴衣と同じ柄の巾着袋を持って、うん、本当に完了。我ながら完璧じゃないかな。「ようこ、出来た？」

鏡の前で回りながら浮かれていると、間延びしたお母さんの声に呼ばれた。

リビングへ行くと、夏祭りには行く気のないお母さんが、長いソファの上に寝転がっている。お父さんは一人掛けのソファに腰掛けて、ニコニコとわたしの方を見ていた。刺身をつまみに缶ビールを飲んでいてご満悦のようだ。お母さんと同じく、夏祭りには興味ないらしい。

「おお。綺麗だな」

「ふふ、ありがとう」

「ようこ、後ろ向いて？」

お母さんに言われるままに後ろを向くと、おはしよりとりボンを少し整えてくれた。

「うん、上手。もうお母さんより上手じゃないの？」

「ホント？やったあ！」

褒められて単純にうれしくなる。

お母さんが趣味で着付けを習って、その練習の相手をしながらわたしも勉強したから、着付け歴は一緒。それでもちやんとした着物は、わたしは着る機会が少ないから苦手なだけだね。

「じゃ、行ってくる」

「楽しんできなさいね」

「あんまり遅くなるなよ」

「はい」

下駄を履いてカラカラと音を立てながら、わたしは玄関を出た。

昨日の内に夏祭りは誰と出掛けるのかと聞かれ、友達的美香ちゃんなどと嘘をついていたので、今日はもう聞かれなかった。

もちろん二人は、わたしに彼が出来ただなんて思ってもいないんだろう。

それで、いいのだと思う。

親の知らないことなんて、本当は親が思っている以上に多いんだ。

待ち合わせ場所は、小さな神社だ。

ここには鳩がいっぱいいて、わたしは小さい頃からよく追いかけて遊んだ。触ってみたくて追いかけるのに、50羽以上いそうな鳩たちは、わたしの歩く速度にあわせて歩いて逃げる。飛んで逃げないあたり、なめられているとしか思えない。生意気だぞ、鳩。

今日もつい、鳩を追いかけてそうになつていたわたしに、灯籠の階段に腰掛けていた彼が、笑いを含んだ声を掛けて来た。

「葉子ちゃん」

浴衣姿の彼が涼しげで格好良くて、わたしははにかんだ笑顔になつてしまった。

「忍くん」

黒地に白いラインの入った浴衣を見事に着こなした彼、さだみね定峰忍の姿に、悔しいくらい見蕩れた。白地に波の模様の入った帯も、わた

しの目から見てもちろんと巻かれていて、一緒に歩くのがもつと嬉しくなった。

帯の位置が高すぎて、バカボンみたいになっている男の子も結構いるもんね。あれはとっても残念。

日に焼けた忍くんの精悍さに、浴衣が大人っぽさを足していてドキリとする。

それでも。

「格好いいね」

サラリと言ってしまったのは、年上の余裕を見せたいと心のどこかで思っているからなのだろうか。

「葉子ちゃんも、すごく綺麗だ」

ニコツと笑い掛けられて、わたしは急速にドキリどころではなくなつた。

「あ、ありがとう、とう」

うつむいたわたしの手をとって、忍くんは歩きだした。

「行こう？」

「う、うん」

繋いだ手からも心臓の音が聞こえてしまうのではないかというくらい、わたしは全身がバクバクしていた。

そつと顔を上げて、少し前を歩く忍くんを伺い見る。

(ほんと、格好いい……)

忍くんとわたしは、お互いに物心ついた頃からの知り合いだった。隣の地区だから、学校も違うし、小学校の頃は地域の運動会やイベントでしか会うことはなかったので、幼なじみというのは違うのだと思う。

昔から、綺麗な男の子だと思っていた。

手足も長く造作の整った忍くんに「きつといい男になるよ」「なんて、恥ずかしげもなく言っていたのは、もう五年は前のことになるだろうか。

本当にいい男になっちゃったね。

手を繋いで歩いているのがわたしで申し訳なくなるほどに、忍くんは格好良い。あんなにちっちゃかったのに、なんて、もう言えないほど。

「葉子ちゃん？なに考えてるの？危ないよ？」

祭りの人混みに入ってしまった、忍くんが困ったような顔でわたしを見ていた。

「ごめん、なんでもない」

「そう？ちゃんと握っていてね」

繋いだ手にキュツと力がこもって、既にドキドキがピークだ。

その時、いつもの声がわたしの耳を通り過ぎた。

『ティルア……』

……どうして、こんな時に。

思わず立ち止まってしまったわたしを、忍くんが振り返る。

『たすけて、ティルア』

まだ幼い少女の声は、恐怖に震えている。

「どうしたの？」

忍くんの不思議そうな声。

重なった声に、二つの意味で首を横に振った。

当然返事は、忍くんにだけあてたもの。

「なんでもないの……ごめんね？とろくて」

「ううん、そういうところも可愛くて好きだよ」

微笑んで言われた言葉に、ボンツと音がしてしまいそうなほど、わたしは顔から火を吹いた。

一瞬にして冷え切った心を、忘れるほど。

「あ、ああああ……あり、がとう」

「どういたしました」

くすくすと笑いながら忍くんがまた歩き出す。

「まだ花火まで時間があるよ。葉子ちゃんは何をして遊びたい？それとも何か食べる？」

年下、しかも中学生とは思えないほど、忍くんはリードが上手だった。まあ、一歳しか違わないんだけどね。

わたしたちは、ヨーヨー釣りや射撃でさんざん遊んで、お好み焼きとかき氷を買ってから、花火を見るために遊び慣れた防波堤に腰掛けた。

「ああ、楽しい」

思わず溜息のようにこぼれた言葉に、忍くんは嬉しそうに笑う。

今日一番というくらい距離が近くて、わたしの左耳に忍くんの息が掛かるのが分かった。

「うん、僕も。葉子ちゃんと一緒に花火が見れる日があるなんて思ってたから、本当に嬉しい」

大袈裟な物言いだなと思って、わたしは首を傾げた。

「忍くん？」

「……ずっと、好きだったんだ」

「そ、そう、だったの？」

うん、と照れくさそうに笑う忍くんを見ながら、わたしは胸がキョウツと締め付けられるような感覚を味わっていた。

『ずっと、好きだったんだ』

思い出したのは、忍くんではない、もっと大人の男の人の声。

『テイルア……』

テイルアを呼ぶ声は、いつも苦しそうで、切なくなる。

今日は、その声は聞こえない。

「葉子ちゃん？」

頬に触れた手に、ハツとして我に返る。

「どうしたの？今日はいつもよりもぼーっとしてるよ？」

忍くんの手が頬から額へと移動する。熱がないか確認してくれて

いるのだと分かって、慌てて忍くんの手を額から引き剥がした。

「大丈夫、熱なんかないよ。ごめんね……なんか、緊張しすぎちゃってるのかな？」

あははと笑って誤魔化してみる。

そう？と忍くんはまだ心配そうだ。

わたし、大根役者なのね。どこがおかしいのバレバレ。

でもね、どこがおかしいのか、わたしにも分からないの。

分からないんだ。

だから、笑うしか無い。

「……もうすぐ、花火はじまるね」

「そうだね」

忍くんは、防波堤の上に置いたわたしの左手の上に、そっと右手を重ねて来た。忍くんの顔は、もうすぐ花火があがる方向に向けられたままだ。

鼻が高い忍くんは横顔も素敵で、何でわたしが彼女なのかやっぱり分からない。

何でって言うと、忍くんが告白してくれたからで、わたしも気になっただけ。

じゃあ、何で忍くんがわたしに告白してくれたのか。

ずっと好きだった、から。

『ずっと、好きだった』

ねえ、忍くん。

ずっと、っていつから？

ねえ、貴方。

ずっと、っていつから？

いつまで？

『ティルア……愛している』

風のように通り過ぎる、大人の男の人の声。

ねえ、愛、って何？

ティルアって、誰？

貴方は、誰？

どうしてそんなに切ない声で、ティルアを呼ぶの？

『たすけて、ティルア……』

蚊の鳴くような、儚げな少女の声。

ねえ、ティルアって、誰？

貴方は、誰？

たすけて、ってどうということ？

物心ついた頃から、聞こえる声たち。

両親に言ったら「バカなことを言わないの」と、いつも怒られた。そのうち言わなくなっただのは、聞こえなくなっただからじゃないよ。

お母さんが、恐ろしいものを見る目でわたしを見るから。

お父さんが、可哀想な子を見る目でわたしを見るから。

だから、聞こえないフリをするようになったの。

でも、聞こえる。

聞こえるんだ。

聞こえる、だけなんだ。

パーン、と空に花が咲く。

「わあ……」

無邪気に夜空を振り仰いで、次から次へと色とりどりの花が咲き乱れるのを見ている。

なんて、綺麗。

なんて、神秘的。

だんだん花火が大きくなると、音が山に反響して、ドーンとより大きな音になる。座っている防波堤に振動が伝わってくるほど、花火は近い。

「ほんとうに、綺麗だ」

溜息混じりの忍くんの声に、そうだねと左を向くと、なぜか忍くんは花火ではなくて、わたしを見ていた。

「忍く……」

大輪の向日葵が夜空に咲いた時、忍くんの口唇はわたしの口唇に重なっていた。

触れるだけの接吻は、思ったより長くて、忍くんの口唇から彼の震えまで伝わって来る。忍くんにとっても、きっと初めての接吻なんだと分かった。

次第に恥ずかしくて堪らなくなったわたしは、うつむくようにして忍くんの口唇から逃れた。たぶん、今わたしは耳まで真っ赤になっ
っているに違いない。

「あ、熱い……ね」

「そうだね……」

熱い、と言いながら、忍くんは重ねた手を離そうとはしなかった。ドカーンドカーン、とクライマックスを迎えた花火はとても大きく、花びらが真上から降ってくるかのような錯覚を覚える。

『たすけて…… ティルア…… 熱いよっ……』

花火の音と一緒に、悲鳴が耳の中に響いた。

堪らずに目を瞑ったわたしを、忍くんが笑う。

「大丈夫、ここまでは落ちてこないよ」

「う……ん……」

そうじゃない。

そんなことは分かっているの。

怖いのは、そんなことじゃない。

『熱いよ、ティルア……苦しい、よ……』

次第に息も絶え絶えになっていく、声。

もう、間もなく

この声は、聞こえなくなる。

いつも、そう、だ。

『ティ……ル……』

わたしは顔を両手で覆った。左手に重ねられていた忍くんの手もはねのけて。

「……葉子ちゃん？」

「ごめん、わたし……帰る」

「え？」

フィナーレの盛り上がった花火が次々と打ち上がる中、忍くんがわたしを呼ぶ声は掻き消された。

浴衣でも、下駄でも、着慣れたわたしには走ることに妨げにはならない。

走って、ただただ、走った。みんなが花火を見上げているのと反対の方向を向いて、人をかき分けるようにして、走る。

もう、無理だ。

もう、イヤだ。

今まで、わたしは何度、彼女が生き絶える瞬間の声を聞いてきたのだろう。

これから、わたしは何度、彼女の最期の声を聞かなければならな

いのだろう。

ねえ、怖い夢を見た時に、こう思うことはない？

こんな怖い夢をもう一度見るくらいなら、死んだほうがまだとそれほど怖い夢を、見たことはない？

せめて、夢なら、いいのにと思う。

目を閉じて見る夢なら『変な夢をみる』だけの、普通の子でいられるのに。

もしくはもつと現実であればいいのにと思う。

助けられるものなら、助けたいよ。

わたしはテイルアではないけれど、もしかしたら、なにか出来ることがあるかもしれない。

気が付くと、家の前まで帰ってきていた。

忍くんに、悪いことしちゃったなど、ようやく後ろを振り返る。

初デート、だったのに。

ファーストキス、だったのに。

最悪の想い出ししてしまったのだと思うと、申し訳なさに涙が滲む。

ふと巾着袋の中の携帯電話が震えているのに気が付いて、慌てて取り出す。『定峰忍』と表示されているのを確認して、すぐに通話ボタンを押した。

「もしもし？葉子ちゃん？ああ、良かった。やっと繋がった」

心底安堵した忍くんの声に、罪悪感が沸き上がってくる。

「忍くん……ごめんなさい、あの」

「葉子ちゃん、今、どこにいるの？」

「あ……家、の前」

そう、と忍くんが深く息を吐いたのが聞こえた。

「それならいいんだ」

「え？」

「今日、やっぱりどこか体調が悪かったんじゃない？ずっとおかしかつたし」

どこまでもわたしを気遣ってくれる忍くんの優しさに、涙が零れた。

「葉子ちゃん……泣いているの？」

電話越しに伝わってしまったのだと分かって、わたしはあえて明るい声を出した。

「な、泣いてなんか、いないよ？」

何かを言おうとする忍くんの言葉を遮って、わたしは、続けた。

「今日、ごめんね。途中で一人で帰っちゃって」

「え？」

「それと、ごめんなさい。わたし、やっぱり忍くんとは付き合えない」

「え？それ？どういっ？」

「ごめん、なさい……」

受話器の向こうで、今、忍くんはどんな顔をしているのだろう。ずっと、好きだったと言ってくれた。

その人との縁を、わたしは、電話一本で切ろうとしている。

「葉子ちゃん、待って、あの」

「本当に、ごめん」

一方的に言い切って、わたしは電話を切った。

無理だと、思ったんだ。

わたしだけ幸せになることなんて、許されないことだと、思って

しまった。

ずっと、普通の娘になりたかった。

ずっと、小学校に上がる前から、普通の娘を装って、生きて来たの。

普通に、恋なんてしちゃって、結婚なんかもしちゃって、さ。

謎の声なんてものからは耳を塞いで、全部、聞こえないフリをして、幸せに暮らそうって。

でも、聞こえる。

わたしを、ううん、ティルアを呼ぶ声が。

だから、わたしは、探してみようと思う。

彼女を助ける方法を

ほんつとうに、ささやかな変化、なんだけどね。

人から見れば、笑われてしまうほど、ちっぽけなこと。

わたしは、『ミステリー研究会』っていう、怪しげな部活に入ってみようと思う。

そして、今まで親以外にはだれにも言わずに来た、自分の身に起きた不思議なことを、だれかに話してみようと思うんだ。

もしかしたら。

彼女たちに会うために、『遺書』が要らない方法が、あるのかも
しれないから。

(後書き)

最後まで読んで下さって、本当にありがとうございました！
なにはともあれ、葉子が一步を踏み出せたことを、この物語の終りと考えました。

もし、沢山の方に希望していただけのようなことがあれば、続きを書くことがあるかもしれません。希望してもらえなくても、ただ私
が書きたくなるかもしれませんが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8351v/>

Voice to call you ~君を呼ぶ声~

2011年8月16日03時20分発行